

能動的心理療法における夢の利用

名 島 潤 慈

The Use of Dreams in Active Psychotherapy

NAJIMA Junji

(Received December 2, 2002)

This work sets out to examine the issue of activeness in the area of dream analysis. The dominant focus of research on dreams has been an exploration of the meaning of derams. In the author's view, however, dreams have various clues to dealing with crises. In this paper, it has been asserted that the major functions of dreams lie in announcing and requesting. As the dream announces the dreamer his or her psycho-socail crisis, the dreamer is able to cope with crisis with a help of the therapist. Consequently, the dreamer will develop his or her activeness which is indispensable to live through turbulent modern times. According to Robert L. Van de Castle's book entitled "Our Dreaming Mind", Emerson said, "A skillful man reads his dreams for his self-knowledge." Borrowing his manner of speech, we can say, "A skillful man utilizes his dreams for overcoming his difficulty of living."

Key Words : active dream analysis, activeness, Active Psychotherapy

I 本稿のねらい

筆者は近年、クライアントの「能動性 (activeness)」の回復と育成をめざす心理療法のあり方を種々検討しているところである(名島, 1995a, 2000abc, 2001abc, 2002a)。ここでいう能動性とは、さまざまな生の困難(危機)にもかかわらず自分に課せられた発達の階段を一つ一つ上がっていこうとするような心的態勢のことである。生の困難の代表としては、俗に言う生老病死の四苦、つまり「生きることにまつわる苦」「老いることにまつわる苦」「病気にまつわる苦」「死にまつわる苦」が挙げられる。これらのうち、生きることにまつわる苦は、大切なものを失うことにまつわる苦、他人と比較することにまつわる苦、信と不信にまつわる苦、なすべき人生課題が見つからないことに関する苦などに分けられよう。

能動的心理療法の特徴を簡単に言えば、次のようなものである。①人間というものを「自

分なりに創意工夫しながら生の困難に対処していく存在」としてとらえる。②セラピストの基本的な姿勢としては、クライアントの心のなかに内在化していると推測されるクライアントの「建設的自己 (constructive self)」を信頼する。③この建設的自己は危機に対する工夫の創出を通して活性化されるので、クライアント自身の工夫の創出が可能となるようにセラピストからの介入を工夫する。④セラピストとしては常に「転換 (conversion)」の機制を考慮する (名島, 2002b)。転換には、場の転換・対象の転換・目的の転換などがある。例えば、「道路で人を叩く代わりにリングで叩く」は場の転換、「手首を切る代わりに献血に行く」は目的の転換である。前者では「人を叩く」という手段は同一、後者では「体から血が出る」という現象は同一である。(筆者自身はつねづね、転換という機制には人生の秘密が隠されているのではないかと考えている。)

ところで、話を夢に限定した場合、セラピストは臨床場面においてクライアントが報告してくれる夢を、いったいどのようにしたらクライアントの能動性の回復や育成に結びつけることができるのであろうか。本稿ではこのことについて吟味してみたい。

II 夢の機能と意義についての従来の説

夢の機能や意義に関しては、これまでさまざまな説が主張されてきている。

(1) Sigmund Freud (1856-1939) : Freud (1900,1940) は夢というものを「ある (抑圧され・排斥された) 願望の (偽装した) 充足である」とみなし、さらには、睡眠の守護者としての機能を強調して、「夢は常に睡眠を妨げるものを願望充足によって排除しようとする一つの試みである」と述べている。夢についてのFreudの見解を一言で言えば、夢 (顕在夢) はその真の意味 (潜在思考) を隠すものである、ということになる。

(2) Carl Gustav Jung (1875-1961) : Freudと別れて分析心理学 (Analytical Psychology) を樹立したJungは1928年11月14日に行った夢のセミナーで、夢とは「無意識からのメッセージ」であり、「自分の心理や主観的な世界において誤っていることのすべて、私たちが自分自身について知るべきことのすべてについて、夢は私たちに情報を与えてくれる」ものであり、夢とは「私たちがまだ消化していない事柄を同化させようとする試み」であると述べている (Jung, 1984)。Jungはまた、夢の持つ補償的機能を強調し、「夢は意識の態度に対する補償である」「夢とは自己統御をする心的組織が示す自然な反応である」「平衡を回復しようとする心的組織の試みである」と述べている (Jung, 1963, 1968)。Jung (1984) はさらに、夢の持つ「指導的機能 (guiding function)」を強調している。ちなみに、夢分析におけるJungの基本的な技法は「増幅法 (拡充法)」である。これについての詳細は、*Dream Analysis* (Jung, 1984) と *Kinderträume* (Jung, 1987) が大変有益である。

(3) Alfred Adler (1870-1937) : Freudと別れて個人心理学 (Individual Psychology) を樹立したAdler (1932, 1936) は、夢というものを「諸問題に対する安易な解決を手に入れようとする企て」とであるとみなし、「あらゆる夢は自己陶醉、自己催眠」と述べている。これをもう少し詳しく言えば、われわれは、夢のなかでは自分自身を欺いて不適切な問題解決を行う。この場合不適切というのは、「共通感覚 (common sense)」という観点からみた場合のことであって、本人自身の「人生のスタイル (the style of life)」という観点からすれば適切な問題解決なのである。結局Adlerによれば、

人は夢のなかで自分の人生のスタイルに合致するような問題解決を行うが、それは自己欺瞞に他ならないということになる。

(4) Harry Stack Sullivan (1892-1949) : アメリカ生粋の精神科医であり、積極的心理療法 (Intensive Psychotherapy) を唱道したSullivan (1947) は、意識から解離されたものが眠っている間に夢のなかへと排出されることを強調し、「夢の働きは、単に睡眠という出来事を守るだけでなく、解離という現象が存在する場合でもなお適応を維持し精神の健康を保てるようにしていることである」と述べている。もっともSullivan (1956) が、「憎悪に満ちた人々の夢過程は、積極的・建設的な欲動が溜まっている、その緊張を開放するのが実際の目的であるところの象徴的操作を含んでいることがみられるだろう」と述べる時、彼はFreudの説に近似してくる。

(5) Erich Fromm (1900-1980) : 精神分析のなかでも文化学派 (cultural school) に属するFromm (1951) は夢の持つ洞察的な機能を強調し、「夢のなかでは、他人に対するわれわれの関係ないしわれわれに対する他人の関係への洞察や、価値判断、予言が起こるばかりでなく、目覚めた状態のときよりもすぐれた知的な働きが存在する」と述べている。

(6) Calvin Springer Hall (1905-1985) : 夢の認知理論を提唱した心理学者のHall (1951, 1953) によれば、夢見 (dreaming) は眠りのなかの思考であり、認知的な過程である。夢というものは夢主の主観的現実に関する信頼すべき情報源であり、夢主のさまざまな考え (thoughts, conceptions, ideas) をプライベートな形で表示してくれるものである。夢解釈は、夢イメージの背後に横たわっている夢主の考えを見つけだすことにある。

(7) Eugene T. Gendlin (1926-) : 現在、フォーカシング指向心理療法 (Focusing-Oriented Psychotherapy) を提唱しているGendlinはかつて、彼が創案したフォーカシングの技法を夢に適用した (Gendlin, 1986)。これは、①夢主の連想を導く3つの質問、②夢の粗筋や登場人物を問う3つの質問、③夢のなかの登場人物と関わる3つのやり方、④暗号を解読するための3つの方法、⑤変化や成長に関する4つの問いかけからなる。これらの質問や問いかけを受けた夢主は、自分の頭で考えるのではなく、自分のからだのなかの、夢のフェルトセンスに問いかけるようにする。ちなみにGendlinは、夢主が自分の見た夢から成長の方向をうまく感じ取れない場合に行うバイアスコントロールの仕方をも提案している。

(8) J. Allan Hobson (1933-) : 精神医学者・睡眠学者のHobsonは1977年、McCarleyと共に「夢過程の活性化—合成仮説 (activation-synthesis hypothesis of the dream process)」を提唱した (Hobson & McCarley, 1977)。後にHobson がまとめた *The Dreaming Brain* (Hobson, 1988) と *Sleep* (Hobson, 1989) によれば、夢見は、脳幹が提供する「活性化」と、前脳、それも特に皮質と記憶に関わる皮質下領域が提供する「合成」から成っている。前者の活性化は、レム睡眠中にニューロン性のエネルギーによって脳が自己活性化されるというものである。別の言い方をすれば、レム睡眠中の脳幹は、PGO波のような感覚情報を含む信号を自動的に発生させ (これが夢の映像の発信源となる)、そうすることによって自らを活性化させている。後者の合成は、レム睡眠時の脳が覚醒時の脳と同じように、データを統合して意味あるものに仕立てていくことである。内的に発生した信号 (内因性の感覚刺激) に対する意味付加過程と言ってもよい。

以上見てきたように、これまで夢についてはさまざまな専門家の見解が提出されてきている。AdlerやHobsonを除けば、全体的には夢を意義深いものとみなしている。特にFrommは、夢の持つ洞察的機能を強調している。Jungの言う「私たちがまだ消化していない事柄を同化させようとする試み」とか「指導的機能」というのは、きわめて目的論的な視点である。Freudは、夢そのものは偽装されたものであるとみなして潜在思考のほうを重視したが、しかし、夢主の潜在思考を推測できるのも夢があればこそである。「夢は無意識への王道である」というFreudの言葉はこのことを意味していよう。

能動的心理療法の立場からすれば、夢とは、夢主（クライアント）が覚醒時において直面している危機、つまりは生の困難に対して夢主がどのように対処したらよいかということについて夢主自身が考えるきっかけを与えてくれるものである。夢はまた、夢主の能動性のあり方を示してくれる。

わけても重要なのは、夢は建設的自己の出現をもつばら隠喩（metaphor）の形で示してくれることである。これは特に、「能動夢（active dream）」（名島, 1995b）、つまり夢主が積極的・能動的に夢を希求するような態勢のときに見られる夢にあてはまる。能動夢は「聖所の籠りの夢（incubation dream, dream of incubation, incubated dream）」とか、夢主がクライアントとして夢分析を受けているさいに見られる夢などであり、受動夢に比べると長期記憶的・啓示的・特異的な性質を有する。

Ⅲ 告知・要請・対処について

要約すれば、夢の主たる機能は告知（annunciation）である。この場合、告知には直接的な形のものと同喩的な形のものがある。後者の場合、セラピストは隠喩を隠喩としてうまく活用していくための工夫が必要となる。

告知は、夢主自身に対する告知とセラピストに対する告知という二重の側面を有している。これは、本稿で取り上げる夢というものがもつばら臨床場面において報告される夢だからである。報告される夢は、クライアントとセラピストによって検討されることを前提としている。もともとクライアントは何らかの心理・社会的危機に陥っているからこそクライアントとしてセラピストの眼前にいたのであり、したがってセラピストは、危機への対処を要請されていることになる。その意味では、告知は、それを受け取る側からすれば要請（request）である。

さて、夢というものを夢主に対して危機の様態を知らせてくれるものであるととらえると、夢主の役割はそれを読み解いていき、危機に対する対処を工夫することにある。この場合、夢の読み解きやそれに基づく対処が夢主一人でできないときには、セラピストという第三者を必要とすることになる。

ただしその場合、セラピストが夢主になりかわって対処法を工夫・案出してやるということになると、それはかつての夢解きや夢占い（占夢者）が行ったことと同じになる。古代の天皇・貴族・庶民は悪夢や凶夢を見た場合、官人ないし私人の「陰陽師」、「夢解きかんなぎ（民間の口寄せ巫女のなかでも夢占いを行う人）」や「相人（人相見のこと）」などに夢の吉凶を占ってもらったり、アドバイスを受れたり、さらには陰陽師に夢祭（解悪夢祭・悪夢祭とも言う）を行ってもらったりしたのである（名島, 1996を参照）。陰陽師や夢解きかんなぎが行った夢の解読法や夢の意味づけは古代中国に発する陰陽五行説に基づ

くものであり、彼らは夢主の内的枠組みについてはまったく顧慮しなかった。しかしながらここで重要なことは、夢の意味を解く側のほうの考えを夢主に押しつけることではなくて、夢主自身の意味づけや発想を大切にすることにあつたのではないかと思われる。

IV 夢の結末部に関する対処法の吟味

1. 結末部の取り上げ方

夢は、夢を構成しているさまざまな夢素材 (dream material) から成り立っている。夢素材は最近ではもっぱら夢要素 (dream element) と呼ばれることが多いが、ここでは Hall (1951) にならって夢素材としておく。

夢素材を具体的に言えば、夢のなかに登場する人物・動物・物・夢のなかの感情・夢の結末などである。これらのうち、本節では夢の結末を取り上げてみたい。

例えば中学校の不登校の女子生徒Aが、「もうちょっとのところで皆の乗っているスクールバスに乗り遅れた。やっぱり自分はだめな人間だと思って悲しくなった」という夢を見たとする。この場合、セラピストとしては、自分がだめかどうかということはいったん括弧に入れておいて、スクールバスに乗り遅れたのなら、スクールバス以外で学校に行くような手段が他にないかどうかということについてAと話し合ってみる。

その場合、Aに対する具体的な質問内容としては、<あなたは夢のなかでスクールバスに乗り遅れてしまったのですが、今から考えると、この場合どんなふうに対応したらよかったですか？><もしも今後スクールバスに乗り遅れることがあったら、あなたはどんなふうに対処したいと思えますか？><スクールバスがだめだとしたら、他に何らかの方法を思いつきませんか？>といったものになる。可能性としては、Aがそのまま走ってスクールバスを追いかけるのもいいし、もしも手元にお金があるのならタクシーをつかまえて皆より先に学校に到着するといったことも考えられよう。要するに、Aの否定的な自己評価を受け入れて事態を処理するよりも、Aなりの工夫を案出するよう促してみることが大切となる。(自己評価とは多くの場合、「回避」を「逃避」とみなす類のものではないかと思われる。) 夢はたえず、夢主に対して工夫と予行演習を要請するものである。

別の不登校の女子中学生Bが、「皆と一緒にエスカレーターに乗っていると、いつもなぜか自分だけがエスカレーターから転げ落ちてしまう」という夢を見たとする。セラピストとしては、この場合もスクールバスのときと同様、Bがどうやってもエスカレーターから転げ落ちてしまうのなら、何か別の手段が利用できないものかどうかをBと話し合ってみる。Bが閉所恐怖症でなければエレベーターを利用できるし、通常の体力の持ち主なら階段を利用できよう。もちろん、皆がBを取り残したままエスカレーターで上っていった後B一人でエスカレーターに乗って皆の後を追いかけるといったことや、エスカレーターから転げ落ちたその日ではなくて、別の日に再度エスカレーターに挑戦してみるといったことなども考えられよう。

中年の会社員Cが、「重いトランクを右手に提げて運んでいたが、途中でトランクを落としてしまい、なかの物が壊れてしまった」という夢を見たとする。この場合にも、重いトランクにどのように対応したらよかったかという点についてCと話し合ってみる。可能性としては、ころ付きの台車に乗せてトランクを運ぶとか、誰かもう一人別の人に手助けを

頼んで、その人と一緒にトランクを持って運ぶとか、もしもトランクの中身を分割できるなら、右手と左手に荷物を振り分けて運ぶなど、いろいろな方策が考えられよう。

要するに、セラピストとしては、夢の結末の部分に提示された危機に対してどのように対処すればよかったのかということクライアント自身が考えるようクライアントを促すことが大切となる。

2. 原因論の問題

夢の結末について話し合う場合、セラピストとしては原因論にはあまり入り込まないようにする。〈なぜあなただけスクールバスに乗り遅れたのでしょうか？〉〈なぜあなただけエスカレーターから転げ落ちてしまったのでしょうか？〉〈なぜ右手で無理をして重いトランクを運んでいたのでしょうか？〉などといった質問をクライアントにすると、クライアントの思考は果てしなく原因論へと向かっていってしまうことになる。

しかしながら、クライアントが言い立てる「原因」が真実のものであるという保証はどこにもない。むしろ、クライアントのそのときの気分とか、そのときに支配的な観念によって原因が組み立てられてしまったりする。セラピストの態度としては、原因よりも対処のほうに重点を置くようにするとよいだろう。

もちろんクライアントのなかには、セラピストがことさら質問しなくても、クライアントのほうから原因とおぼしきことを言い立てる人がいる。「もともと私は不幸の星の元に生まれているから、何をやってもうまくいきません」「親の育て方が悪かったから、いつも私はへまをしてしまう」「これまで自主性が育つ機会に恵まれなかったから、どうしても人とうまくやれない」「小学校時代から皆にいじめられてきました。私には人に嫌われるところがあるから、いつも一人ぼっちになってしまう」など、内容はクライアントによってさまざまである。さらには、同一のクライアントが時期によって異なる理由づけをしたりする。このようにクライアントのほうから原因論的なものについて述べていく場合、セラピストとしてはクライアントが語ることに傾聴はするものの、それに情緒的に巻き込まれないようにすることが大切である。そして、適切な機会を見計らって、話の焦点を対処・対応へと移し替えることが大切となろう。

原因論は当然のことながら、過去遡及的である。話の流れでどうしても過去遡及的な方向を取り上げなければならないとしたら、セラピストとしては、あくまでも夢自己と覚醒自己との対応性という線に沿って質問してみる。この場合の対応性質問の例としては、〈これまで実際にスクールバスに乗り遅れた場合、どんなふうにしていました？〉〈スクールバスに乗り遅れても、うまく学校に間に合ったことはこれまで一度もなかったんですか？〉などである。

V 焦点の移動について

1. 焦点を移動させることの意義

能動性という観点から見た場合、ある夢についてクライアント自身が焦点づけしている箇所とは別のところが重要な場合がある（名島，1998を参照）。セラピストとしては、このことによく注意しておく必要がある。

例えば、夫婦関係に苦悩していたある40代の主婦Dは、「夢のなかでは暗いトンネルの

なかを出口のほうへ向かって進んでいました。前方に光が見えたと思ったら、出口のあたりに土砂崩れが起こり、出口はふさがれてしまいました。私は何とも言いようのない感じで目を覚ましました」と述べた。セラピスト（筆者）が「出口がふさがれてしまった後どうなさいました？」と質問すると、Dは、「はっきりとは覚えていませんが、わーわー泣きながら、両手で土砂をかきわけていたように思います」と述べた。この夢についての感想を聞くと、Dは、「今の私の状態とよく似ています。出口がふさがった状態で、本当に何とも言いようのない感じのする夢でした」と述べた。

このように、D自身の焦点は明らかに、「ふさがれた出口」というところに置かれていた。そこでセラピストはDに、「あなたが今おっしゃったのはトンネルの出口のことですが、あなた自身についてはいかがですか？」と質問した。Dは少し考えてから、「せっかく光が見えたのに、土砂で埋まり、ひどく泣いていました」と述べた。セラピストは、「夢のなかのあなたは泣いていただけでしたか？」と質問した。Dはまた少し考えて、「そう言えば、泣きながら土を掘っていました」と述べた。セラピストは、「あなたは夢のなかで土砂、つまりあなたの進路を妨害する物をなんとか除去しようとしていたわけですね」と応じた。Dは、「ああ、そうです」と深く頷いた。

別の対人関係障害の女子中学生Eは、「夢のなかでは吊り橋を渡っていました。吊り橋はひどく揺れているので、私は吊り橋にしがみつこうにして、腹這いになってじりじりと進んでいきました」という夢を報告した。この夢についてのEの感想を聞くと、Eは、「大揺れに揺れる吊り橋は、まったく私の人生そのもののようで、情けない」と述べた。Eはつまり、「大揺れに揺れる吊り橋＝大揺れに揺れる人生＝破壊的自己」というところに焦点をあてたわけである。

しかしながら、この場合セラピストは、（いささかセラピスト主導的ではあったが）別のところに焦点をあてた。具体的には、「吊り橋がひどく揺れているにもかかわらず、あなたは夢のなかで腹這いになって、じりじりと前進していきましたね。そこには何か、ひたむきで一生懸命なあなた自身がよく現れているような感じがします」とEに述べた。これを聞いたEは、はっとしたような表情になった。これがEの自己受容の始まりであった。

橋が大揺れに揺れるので、それにしがみつかざるをえない情けない自分ということであれば、そこにはあまり希望がない。しかし、「橋が大揺れに揺れているにもかかわらず腹這いになってじりじりと前進しようとする自分」はまさに「建設的自己」（名島、2002b）の現れであり、大変いとしいものである。それまでのEができなかったことは実は、このようにいとしい自分というものを自分で抱きしめてやるということであった。この夢は、激しく動揺する人生を健気にも乗り越えていこうとしているE自身を正当に認知することをEの意識に要請するものであった。つまり、それまで不当に貶められていた自己価値の転換をEに促す夢であったと言えよう。

ある30代の不安障害の女性Fは、「全体のトーンが暗い。夢のなかでも落ち込んでいた」と前置きして、「バスから降りたときに誰かに呼び止められたが、私は行くところがあるのでそのまま黙って歩きだそうとしたら、ごっつい木の葉がたくさん柳のように地面の上に垂れ下がっていたので、空いている空間を探して進んでいった。前が見えない状態でじりじりと這っていった」という夢を報告した。この夢についての感想を聞くと、Fは「さみしさ」を強調した。せっかく呼び止めてくれた人がいたのにそれを振り切って進んでいかなければならないというさみしさと、去って行く理由を話したところでその人には分かってもら

えないだろうというさみしさであった。これに対してセラピストが、＜前方がよく見えないほどの妨害物があってもなおかつ進んでいくというのは、私にはなかなかいい感じがしますが＞と言うと、Fは考え込んだ後、「今の自分は今の状況を抜け出ようといろいろしているから、そのことかなー」と呟いた。

ちなみに、Fは次の回の面接で一つの夢を報告した。それは、面接がある日の早朝に見たもので、内容は、Fが日頃あまりいい気持ちを持っていないある人物をめぐる夢のなかでトラブル事態となったが、Fはその人物に対する自分の感情を押さえて、どう対応すればいいかもちょっと冷静に考えてみようという夢のなかで思っている、というものであった。それまでのFはすぐに怒ったり不安になったりしていたのであるが、この夢では、「もうちょっと冷静に考えてみよう」という形で感情をコントロールしようとする試みがうかがえる。このように、それまでのカウンセリング作業によってFの能動性は既に回復しつつあったのであるが、「ごっつい木の葉がたくさん垂れ下がっている夢」についての感想においては、Fはそのことに気づかず、もっぱら「さみしさ」に焦点をあてていたのである。

一般的に言って、さみしさや抑うつ感が長く続いているクライアントの場合、クライアントの意識はもっぱら夢のなかの「暗い部分」や「暗い感情」のほうにひきつけられるので、焦点の移動がスムーズにいかないことも少なくない。その場合には、介入上の工夫がセラピストに求められることになる。

以上、本節では三つの夢を挙げた。Dの場合にはセラピストの質問によってD自ら焦点を移動させ、EとFの場合には、セラピストが主導した形で焦点を移動させた。

2. 焦点の移動がうまくいかない場合

セラピストが焦点を移動させたとしても、前述のようにそれが効果的に働かない場合がある。以下、このことについて例を挙げて述べてみたい。

ある20代の無職の男性G（自閉傾向、洗手強迫、抑うつ状態）は、「山奥の畑で女性が野良仕事をしている。誰かが、狼が来るぞ、と叫んだ。そこで場面が変わって冬になり、狼の大群がやってきた。私は喫茶店の前にいたが、狼が来たので喫茶店のなかにいれてもらおう。狼が目の前を過ぎていくのはひどく怖かった。そこでまた場面が変わり、私はアパートの4階か5階の建物のなかでドアを全部閉めて狼の大群が過ぎていくのを待っていた。そうすると朝が来て狼はいなくなり、建物の前で子どもが遊んでいた」という夢をセラピストに報告した。この夢についての感想を聞くとGは、「薄暗いなかで狼の目が光っていたので、怖かった」と述べた。そこでセラピストは、＜狼の大群がやって来たときあなたは喫茶店のなかに入れてもらったし、さらには、アパートのなかでドアを閉ざしてうまく狼をやり過ごしたのではないですか＞と述べたが、Gは、「狼が怖くて、逃げるしかなかった」と述べるだけであった。Gは外界に対する不安が高く、Gの自己評価はきわめて低い。「怖いものをやり過ごした」というふうにはとらえずに、「怖いものから逃げ出した」という捉え方である。

ここでセラピストがこれ以上「狼をうまくやり過ごした」という点に固執したとしても、恐怖にとらわれているクライアントとはすれ違えばかりである。このような場合にはむしろ、クライアントが夢のなかで感じた怖さを共有するだけにとどめておくこととよい。怖さをセラピストに共有されることによってクライアントの不安は徐々に減少していくものである。ちなみにGは後に、「友だちが家のなかで奇妙な物を見たと言ってきたので、そこに行

ってみた。何か黒い物体がいた。そこで私はいったん自分の部屋に戻り、魔よけを持ち出してその物体を追いかけたら、そいつは逃げて行った」という夢を報告した。今回のGは逃げ出さずに、魔よけを用いて相手を追い払うことができたのであった。

VI 夢の結末部の処理についての包括的吟味

筆者は第IV節において、夢の結末の部分に提示された危機と、それへの対処について論じたが、本節では第V節で述べた焦点の移動も含めて、夢の結末について包括的に吟味してみたい。

夢の結末という場合、これまでの経験からすれば、①肯定的な結末、②否定的な結末、③帰結のはっきりしない結末という三つのものに分けられよう。

1. 肯定的な結末の場合

これは、「航海の途中で大嵐に遭ったが、どうにか舵を操ってうまく目的の港に着いた」(20代の男子社会人)とか、「いつも見る夢のように空を飛んでいる途中で墜落しかかったが、今回は両手を必死にばたつかせて、時々腹をこすりつけながらも何とか地面すれすれに飛んでいった」(10代の男子大学生)など、夢の結末が文字通り肯定的な結果に終わるものなので、ここで特に述べることはない。

ただし、このような場合セラピストとしては、夢のなかの危機に対して夢主がうまく対処して切り抜けたということが夢主の覚醒時の生活場面のなかでも実際に見られるかどうか、つまり夢の世界と目覚めの世界との対応性がどのようなものであるかをチェックしておくことが大切である。例えば、〈これまでのあなたはいつも夢のなかで墜落しておりましたが、今回は墜落せずに地面すれすれに飛んでいけましたね。あなたは墜落の危機を乗り越えたわけですが、最近の生活場面のなかで何か思いあたることがありますか?〉といった具合である。

言うまでもなく、夢主が夢のなかで危機を切り抜けたということをきちんと確認しておくことも大切である。例えば、〈墜落しかかったものの必死に努力して地面すれすれに飛んでいったとは、これはなかなかできないことですね〉といった具合である。(ここでいう「確認」とはあくまでも事実の確認であって、夢主への追従ではない。)

2. 否定的な結末の場合

これは先述のA・B・Cのように、夢の結末が明白な失敗・挫折・破壊で終わってしまうので、焦点の移動といったことはあまり問題にならない。セラピストとしては、夢主にとって否定的な結果に終わった夢の結末そのものを検討課題として取り上げ、もしもそういったことが再び起こるとすればどういった対応が可能かといった線に沿ってクライアントと吟味してみる。

「否定的な結末」においては、夢主自身が夢のなかで死んでしまうこともある。形態としては、夢主が高い崖から足を踏み外して谷底に落ちて死んだり、洪水で溺死したり、鉄砲で撃ち殺されたり、火で焼き殺されたり、猛獣に食い殺されたりするなど、さまざまである。筆者自身もかつて夢分析(教育分析)を受けていたとき、東洋人の男性から青竜刀で首を刎ねられるという夢を見たことがある(名島, 1995cを参照)。

これらの事故死・災害死・他殺死の夢は、否定的というよりもむしろ絶望的な結末なのであるが、この場合にもやはり、このような結末が将来実際に起こるとすれば、予めどのような対応をしておけばよいのかという線に沿ってクライアントと検討してみる。

検討するさいの最初の言葉かけとしては、〈あなたは高い崖（もしくは高い所）から転げ落ちて死んでしまいました。今後このような事態を避けるにはどのようにしたらよいと思いますか？〉〈あなたは猛獣（もしくはどう猛で危険なもの）に襲われて殺されてしまいました。そうならないようにするための手だてを何か考えつきますか？〉といったものである。（この場合の「高い崖」「猛獣」は隠喩的表出物である。もしも隠喩の意味的な側面を取り上げるなら、まず最初に、〈あなたにとって高い所という、何か思い浮かびますか？〉〈あなたにとってどう猛で危険なものという、何か思い浮かびますか？〉といったレベルⅡ質問を行い、ついでレベルⅡ質問の答えを利用して対応策を検討することになる。これについては第Ⅶ節で詳述したい。）

特に他殺死の場合、クライアントのなかには、夢の感想として、「私のように罪深い人間は、野獣に食われて当然です」などと述べることもある。このような場合セラピストとしては、クライアントが「野獣に食われて当然の人間」であるか否かについてクライアントと論争しないよう注意する。クライアントの人間的な価値づけについてクライアントと論争するよりも、殺人的な野獣に対する対応策のほうにクライアントの意識を向けてもらうことが大切である。クライアント自身の人間的な価値づけは、対応策についてクライアントとあれこれ協議したり、クライアントが日常の生活場面のなかでそれを実地に試みたりするなかで、自ずと正しい形でなされてくるものである。

最後に注記しておく、夢のなかで夢主自身が死亡する場合、夢主の死が変化の隠喩であることがある。つまり、新しい自分が生まれるには古い自分が壊れることになる。その古い自分の破壊が夢主の死としてイメージ化されるわけである。このような場合には、対応策の吟味といったことはあまり問題とはならない。面接場面ではむしろ、古い自分が壊れることへのさみしさや、新しい自分が生まれることへの不安といったものに焦点をあてることになろう。

筆者自身の印象としては、このような古い自分から新しい自分への変化の隠喩は、夢のなかで夢主が自然死したり自殺したりする場合に見られるようである。これらはいわば、夢主の自発的な死である。他殺死の場合には、それは強いられた死であり、それだけに夢主の側には、心理・社会的危機に対する今後の対応が要請されることになる。

病死・事故死・災害死の場合には微妙である。一般的には強いられた死なので、他殺死の場合と同じことが言えよう。ただし、不意に鉄砲で撃たれたり猛獣に食い殺されたりする死と比べると、強いられた死とはいっても、思いがけない形で訪れる死であり、上に述べた変化の隠喩であることもありうる。

3. 帰結のはっきりしない結末の場合

この場合、D・E・Fと同様、多くのクライアントはともすれば自分が置かれた状況の悲惨さや困難さにとらわれてしまい、絶望したり泣いたり、さみしさにとらわれたりすることによって夢を処理してしまうことが少なくない。

しかしながら、夢をよくよく注意して聞いて見ると、夢主が悲惨な状況や困難な状況に対して何とか立ち向かおうとしていることが少なくない。ある特定の部分、それも特に夢

主の意識が見過ごしている部分にセラピストが焦点をあてるということは、その部分をセラピストとクライアントの二人が共有するということでもある。

夢のなかにはもちろん、セラピストがいくら熱心に探しても困難に立ち向かう夢主の姿がまったく見られないものもある。むしろ、頻度としてはこのような夢のほうが多い。ここでは、焦点の移動といったことは問題とならない。

しかしながら、夢は帰結がはっきりしないまま終わってしまうので、夢主は目覚めた後、あるいはセラピストとの面接の場で、「この夢は帰結がはっきりしないまま途中で終わったしまったが、自分としてはあのようなむずかしい状況に実際に陥った場合、どう対処したらよいただろうか」という形で対処法を検討することが可能である。これはつまり、「課題提示の夢」と言ってもよい。

例えばある50代の男性Hは、「海岸で釣りをしていたが、まったく釣れない。そのうち、潮が満ちてきたので車を発進させた。しかし、アクセルを踏み込むと車はバックしていく。ギアの確認して再びアクセルを踏むが、車はまたもやバックしていき、すぐに窓ガラスの外は潮でいっぱいになる。私はひどく慌てる。しかし同時に、車の位置は海の浅い所なので、何とかなるかもしれないと思う。そこで目が覚める」という夢を見た。結局車は陸ではなくて、海のなかへと入っていったわけである。目覚めた後Hは、今後もしもこのように予期に反した事態に直面した場合、どのように対処すればいいかということこの夢によってしたたかに考えさせられることになったのである。

別の50代の女性Iは、「(アパートの) 自室で寝ていると、不意に天井から汚物が垂れてきた。便や小水。大慌てで汚物を受ける物を探しているうちに目が覚める」という夢を見た。この夢の場合もやはり、結末ははっきりしていない。天井から滴り落ちてくる汚物や汚水を受け止める物をIが慌てて探しているうちに目が覚めてしまっている。この場合にもやはり、Iとしては、これから先もしもこのような状況に遭遇したらどのように対応したらよいかという線に沿ってこの夢を考えさせられることとなった。

VII 抽出された夢の意味の利用

筆者の行う能動的夢分析においては、ただ漫然とクライアントの夢を聞くだけでなく、さまざまな介入技法を用いて夢の意味を能動的に引き出していく。ただし、その場合、夢の意味についてのセラピスト側の説明・教示・解釈をまったく持ち込まないで、クライアント自ら夢の意味を見いだせるような介入を行う。具体的には、「感想Ⅱ質問」「対応性質問」「レベルⅡ質問」「潜在感情質問」であり、さらには、さまざまな介入を行っても夢についてのクライアントの有益な連想がまったくといってよいほどなされない場合に行われる「レベルⅢ質問」である(名島, 1997ab, 1999, 2001d)。筆者はまた、夢の持つ伝達的・警告的な側面について問う「感想Ⅲ質問」や、夢シリーズにおいてある特定の夢と別の夢との関連性、つまり夢と夢との共通点や相違点を取り上げる「夢関連性質問」なども考案して、最近の臨床場面で実際に試みているところである(介入技法の全体像は本論文の最後に掲げた表1を参照されたい)。

ところで、このようにして抽出された夢の意味は、クライアントの能動性のあり方や対処法に関する重要な手がかりとして利用できる。具体的な質問としては、<あなたは夢のなかで皆が乗っているスクールバスに乗り遅れてしまいましたが、このようなことは、あ

あなたのこれまでの生活のなかでありましたか？>（対応性質問）、<あなたにとって高い所から転げ落ちるといって、何か思い浮かびますか？>（レベルⅡ質問）、<あなたにとってどう猛で危険なものといって、何か思い浮かびますか？>（レベルⅡ質問）、<猛獣を何かの気持ちにたとえたとしたら、何か浮かびますか？>（潜在感情質問）などといった形になる。

ここで少し、レベルⅡ質問に焦点をあてて夢の意味の利用手順を詳述したい。レベルⅡ質問は、夢のなかの特定の夢素材ないしプロットの質的・抽象的な側面についての夢主の連想を促すものである。猛獣を例に取れば、<あなたは夢のなかで猛獣に食い殺されてしまいました>が、猛獣といって何か思い浮かびますか？>はレベルⅠ質問である。この質問に対して夢主の側の有益な連想が得られなかった場合、セラピストとしては、<あなたにとってどう猛で危険なものといって、何か思い浮かびますか？>というレベルⅡ質問を行ってみる。その結果、夢主が、「それはもう、私の母です」などと言えば、セラピストは、<夢のなかのあなたはお母さんに食い殺されてしまいましたね。これ以上お母さんに抹殺されないようにするための工夫を何か思い浮かべますか？>と質問してみる。

この場合、もしも夢主がレベルⅡ質問に対して、「どう猛で危険といえば、私の職場の上司以外には思い浮かべません。あの男は部下の手柄をすべてわが物にして、おかげで私は討ち死に同然です」などと言えば、セラピストは、<それなら今から、危険な上司に対する対抗策について検討してみましようか。さしあたって何か考えつきますか？ これまで何かやってみられましたか？>などと質問してみるとよいであろう。要点は、上司に対して夢主が抱いているさまざまな思いを聞き取るのではなくて、「上司」に代表される生の困難をいかに切り抜けていくかという方向に夢主の目を転換させるところにある。

VIII 従来の夢分析との比較

臨床場面における夢は、これまでもっぱら「夢分析」という形で取り扱われてきた。ここでは特に、夢の隠された意味や夢解釈の仕方が追求されてきた。筆者自身もこれまで、夢主中心的な形ではあったが、夢の意味の抽出に精力を注いできた。

しかしながら筆者は本稿において、クライアントが報告してくれる夢素材や、もっぱら隠喩の形で表現されている夢の意味をクライアントの能動性と関連させて取り扱うやり方を提示してみた。ここでは、「夢が何を意味しているのか」ということではなくて、「夢が何を夢主に要請しているのか」というところに重点がある。言い換えれば、クライアントが直面している生の困難に対して、クライアントがいかに対処していけばよいかのきっかけを夢が提示してくれるということに重点がある。もともと古代の日本人は危機に際して籠り、籠った場所で得られた夢のお告げに基づいて行動したのである（西郷, 1972; 名島, 1997cを参照）

重点についてさらに言えば、クライアントの自己理解の促進よりも対処のほうに重点がある。実際のところ自己理解とは、あるいは「自己の拡大 (expansion of the self)」(Sullivan, 1947の用語) とは、生活上のさまざまな危機に対する実際的な対処を通して経験的に獲得されていくような性質のものではないかと思われる。生活場面との対応性のない自己理解は、単なる観念の遊戯や操作に近くなろう。Eriksonがかつて抽出した「自我同一性 (ego identity)」という概念にしても、それが実質的に獲得されるのは、本人が

自我同一性の危機をくぐり抜けた後のことである。危機は本人に対して、自分のなかの何が最も大切なものかという実存的な選択と決定を迫るからである。多くのもののなかからある一つのものを選択してそれを死守するということは、それ以外のものを廃棄することである。廃棄には常に痛みと喪失感が伴っている。

最後に、本稿で述べた夢の結末部について付言しておきたい。安永（1978）は、「夢はたいてい何回かの擬似解決による逸脱（横すべり）、そして再切り換えによる本道への復帰を繰り返すことになり、全体としてときどき飛躍のある一種らせん的な系列を形成することになる」「夢は主体に解決すべき“問題”を提示しつづけ、かつこれに対して“解決”を企図させつづける。それが成功するにせよ失敗するにせよ、それは何ごとかを主体に教示することができる。神経症もそれが“擬似解決”の様相を呈するかぎりにおいて、夢の事態と似たところがある」と述べ、夢をその葛藤解決の成功度に応じて、①解決夢、②妥協夢、③悪夢の三つに分けている。

夢の結末部に関するこのような安永の見解は一見筆者の主張と類似しているが、決定的な相違点がある。安永の場合はあくまでも夢のなかでの（擬似）解決である。一方、筆者の場合には、夢のなかの危機が否定的な結末に至った場合、その危機に対してどのように対処すればよかったのかという視点から夢のなかの危機を見直してみるというところに重点が置かれている。もしも帰結のはっきりしない結末部の場合なら、今後もしもその夢のような危機に遭遇した場合どのように対処すればよいかという視点から夢のなかの危機を見直してみる。要約すれば、夢自己（夢のなかの自分）が夢のなかで陥った危機を覚醒自己（目覚めている自分：ここではセラピストと共に夢を吟味しているクライアント）の側から検討してみるところに重点が置かれている。なお、焦点の移動ということに関して言えば、これは夢自己の動きのなかでクライアントが焦点をあてている部分とは別のところにセラピストが焦点をあてるものなので、安永の見解とは無関係である。

IX おわりに

「夜見られる夢」が「記憶された夢」となり、「記憶された夢」が面接場面において「想起される夢」となり、「想起される夢」がクライアントからセラピストに報告されればそれは「報告される夢」となる。そして、この「報告される夢」はセラピストとクライアントの二人に「共有される夢」となる。この「共有される夢」は同時に「検討される夢」でもある。このように、臨床場面に提示された夢は常に、セラピストとクライアントの両者によって検討されることを欲している。

「自己」という概念には古来からさまざまな定義づけが存在しているが、本稿では「自分」ということとほぼ同義に使っている。夢自己と覚醒自己の両者を包み込む自己の部分がある。これを仮に真正の自己と呼ぶ。真正の自己は包括者であると共に媒介者でもある。覚醒自己の変化は夢自己の変化となるし、夢自己の変化は覚醒自己の変化ともなる。

真正の自己には建設的な部分と破壊的な部分がある。これらを強いて分ければ、建設的自己と破壊的自己になる。破壊なくして建設はないし、建設なくして破壊はないので、これら二つは貨幣の両面のようなものである。（真正の自己の中核的部分はおそらく、超越的な性質を有するようなものである。）

筆者がかねがね重視している能動性は、建設的自己と破壊的自己とのせめぎ合いから生

ずる。鍵となるのは転換である。先に述べたように、道路上で歩行者を叩くのは破壊的行為であるが、ボクシングのリングで対戦相手を叩くのは建設的行為である。したがって、臨床上の問題点はセラピストがクライアントにどのように働きかけたら転換が生ずるかということにある。筆者が本稿において吟味したことはこの転換と関わることであった。

要約すれば、夢は告知であるとともに要請であり、クライアントに対して対処と変革を迫るものである。しかしながら、対処と変革には不安や労苦がつきものであり、ともすればクライアントは感情ないし論理（合理化）の世界へと逃げ込んでしまう。ここにこそ、能動性開発の援助者としてのセラピストの役割が存在するものと思われる。

<付記>本論文の要旨は、2002年9月25日、日本心理学会第66回大会で発表した。

表1 夢分析における介入技法

介入	質問名	質問の定義と質問例
一般的介入	レベルⅠ質問*	夢の各素材についての連想を促す質問。「夢素材連想質問」とも言う。<この夢のなかの蛇について何か思い浮かびますか？>
	感想Ⅰ質問*	夢全体についての感想を問う質問。「全体感想質問」とも言う。<この夢についてどう思われますか？>
	感想Ⅱ質問	夢のなかのポイントを問う質問。「夢ポイント質問」とも言う。<この夢のポイント（ないし強調点）はどこにあると思われますか？>
	感想Ⅲ質問	夢の伝達の・警告的側面について問う質問。「伝達・警告質問」とも言う。<この夢が何かをあなたに伝えようとしているとしたら、それは何でしょうか？> <この夢が何かをあなたに警告しているとしたら、それは何でしょうか？>
特殊的介入	夢関連性質問	夢と夢の関連性（共通点ないし相違点）について問う質問。<以前の夢ではあなたが家族と一緒にドライブしているところを津波が襲いましたが、今回の夢ではあなたが一人で散歩しているときに津波が襲ってきました。このような違いについてどう思われますか？>
	対応性質問**	夢自己と覚醒自己との対応性について問う質問。<あなたは夢のなかで誰かに追われていましたが、これまでの生活場面のなかで何か思いあたるものがありますか？>
	潜在感情質問	夢素材のなかに隠喩的な形で隠されている感情について問う質問。<夢のなかに出てきた滝を何かの感情にたとえたとしたら、それは何でしょうか？>
	レベルⅡ質問	夢の質的・抽象的側面について問う質問。「抽象性質問」とも言う。（部屋のなかの水がじわじわと増えてくるという夢の場合）<あなたにとってじわじわ増えてくるものという、何か思い浮かびますか？>
	レベルⅢ質問	夢素材と生活素材とを対提示する質問。「対提示質問」とも言う。<あなたは夢のなかで車のギアを間違えて入れてしまい、車は前進する代わりにバックしてしまいました。ところで以前あなたは、高校の担任との関係がこじれてしまってやむをえず退学せざるをえないということになったとおっしゃったことがあります。さて、このようなことを聞いて何か思い浮かびますか？>

※レベルⅠ質問と感想Ⅰ質問は従来からいろいろな人が用いている質問。この二つ以外は筆者が臨床経験のなかで練り上げていったもの。※※対応性質問の対象は、①自己像（身体像を含む）、②感情、③動き（行動）、④対人的パターンという4つのカテゴリー。対応性質問は、①夢自己と現在の覚醒自己との対応性質問、②夢自己と過去の覚醒自己との対応性質問、③夢自己と過去から現在までの覚醒自己との対応性質問、④夢自己と将来の覚醒自己との対応性質問という4つのものがある。

引用文献

- Adler, A. 1932 *What life should mean to you*. New York: Blue Ribbon. (高尾利数訳, 1984, 人生の意味の心理学, 春秋社)
- Adler, A. 1936 On the interpretation of dreams. *International Journal of Individual Psychology*, 2:1, 3-16.
- Freud, S. 1900 *The interpretation of dreams. Standard Edition*, 4-5. (高橋義孝訳, 1968, 夢判断, 人文書院)
- Freud, S. 1940 An outline of Psycho-Analysis. *Standard Edition*, 23, 144-207. (小此木啓吾訳, 1983, 精神分析学概説 フロイト著作集 9, 人文書院, 156-209)
- Fromm, E. 1951 *The forgotten language: An introduction to the understanding of dreams, fairy tales and myths*. New York: Reinhart & Company Inc. (外林大作訳, 1952, 夢の精神分析-忘れられた言語, 東京創元新社)
- Gendlin, E. T. 1986 *Let your body interpret your dreams*. Wilmette, Illinois: Chiron Publications. (村山正治訳, 1988, 夢とフォーカシング-からだによる夢解釈, 福村出版)
- Hall, C. S. 1951 What people dream about. *Scientific American*, 184, 60-63.
- Hall, C. S. 1953 A cognitive theory of dreams. *Journal of General Psychology*, 49, 273-282.
- Hobson, J. A. & McCarley, R. W. 1977 The brain as a dream-state generator: An activation-synthesis hypothesis of the dream process. *American Journal of Psychiatry*, 134, 1335-1368.
- Hobson, J. A. 1988 *The dreaming brain*. New York: Basic Books. (井上昌次郎訳, 1992, 夢見る脳, どうぶつ社)
- Hobson, J. A. 1989 *Sleep*. New York: W. H. Freeman. (井上昌次郎・河野栄子訳, 1991, 眠りと夢, 東京化学同人)
- Jung, C. G. 1963 *Memories, dreams, reflections*. New York: Pantheon Books. (河合隼雄・藤縄 昭・出井淑子訳, 1972・1973, ユング自伝1・2, みすず書房)
- Jung, C. G. 1968 *Analytical psychology: Its theory and practice. The Tavistock lectures 1935*. London: Routledge & Kegan Paul Ltd. (小川捷之訳, 1976, 分析心理学, みすず書房)
- Jung, C. G. 1984 *Dream analysis: Notes of the seminar given in 1928-1930 by C. G. Jung*. Olten: Walter-Verlag. (入江良平訳, 2001, 夢分析I, 人文書院) (入江良平・細井直子訳, 2002, 夢分析II, 人文書院)
- Jung, C. G. 1987 *Kinderträume*. Herausgegeben Lorenz Jung und Maria Meyer-Grass. Olten: Walter-Verlag. (氏原 寛監訳, 1992, 子どもの夢I・II, 人文書院)
- 名島潤慈 1995a 治療概念としての「能動性」の吟味 九州臨床心理学会第23回大会発表論文集, 76-77.
- 名島潤慈 1995b 能動夢と受動夢-夢の分類私案 日本心理学会第59回大会発表論文集, 221.
- 名島潤慈 1995c アメリカにおける夢分析の経験 精神分析研究, 39:5, 398-404.

- 名島潤慈 1996 日本における夢研究の展望補遺 (Ⅲ) 古代日本に対する中国の影響
熊本大学教育実践研究, 13, 21-36.
- 名島潤慈 1997a 精神分析的な心理療法における夢分析の技法 精神分析研究, 41:1, 1-11.
- 名島潤慈 1997b 夢分析におけるレベルⅡの介入の意義 熊本大学教育学部紀要, 人文科学, 46, 313-328.
- 名島潤慈 1997c 日本における夢研究の展望補遺 (Ⅳ) 籠りの夢の問題 熊本大学教育実践研究, 14, 37-46.
- 名島潤慈 1998 夢の臨床的技法 (鏑幹八郎監修, 一丸藤太郎・名島潤慈・山本 力編著, 精神分析的な心理療法の手引き, 誠信書房, 212-229)
- 名島潤慈 1999 夢分析における臨床的介入技法に関する研究 風間書房
- 名島潤慈 2000a 心理療法における能動性 (activeness) - 能動性の開発法について
平成12年度熊心会例会発表資料 於熊本大学教育学部
- 名島潤慈 2000b 能動的な心理療法における工夫の問題 中国四国心理学会論文集, 33, 7
- 名島潤慈 2000c 能動的な心理療法 - 事例検討 山口大学教育学部研究論叢, 50, 第3部, 37-44.
- 名島潤慈 2001a 能動的な心理療法における「工夫」の検討 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 12, 43-46.
- 名島潤慈 2001b 能動性の観点からみたクライアントの自己工夫 山口大学教育学部研究論叢, 第3部, 51, 17-23.
- 名島潤慈 2001c 工夫するということがよく分からないクライアントについて - 能動的な心理療法における工夫の問題 山口大学教育学部研究論叢, 51, 第3部, 25-31.
- 名島潤慈 2001d 夢分析における「レベルⅢ質問」の検討 山口大学心理臨床研究, 1, 3-8.
- 名島潤慈 2002a 建設的自己と破壊的自己についての若干の考察 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 13, 147-154.
- 名島潤慈 2002b 能動的な心理療法における転換の問題 山口大学心理臨床研究, 2, 15-21.
- 西郷信綱 1972 古代人と夢 平凡社
- Sullivan, H. S. 1947 *Conceptions of modern psychiatry. The first William Alanson White memorial lectures.* New York: The William Alanson White Psychiatric Foundation. (中井久夫・山口 隆訳, 1976, 現代精神医学の概念, みすず書房)
- Sullivan, H. S. 1956 *Clinical studies in psychiatry.* New York: W. W. Norton. (中井久夫・山口直彦・松川周悟訳, 1983, 精神医学の臨床研究, みすず書房)
- 安永 浩 (1978) 精神医学の方法論 (懸田克躬編集代表, 現代精神医学大系第1巻C, 中山書店, 3-45)